



僧都問答

中村俊定文庫
文庫 18
372



星中村後生印

竹中村後生印



叙一

叙(註)

今世能誌四者有りわ、此家
く亦の戸銭かまへて殿英才少
く似たりきとも其一家の發
明のこみして他哉、此は所
なる體ハ、文ハ夏乃む、の
ぬをぢりきまにひきりぬ

宇宙有りをを、保えりな

して能誌自在乃是とハ、語る

屋、く、く、く、我師、兼門、五大

家五大家名
録別見を、して竊、よ、左、右、の、二

三子、子、爾、更、さ、る、も、我、善、地、居、風、高

は、道、を、時、る、と、雪、つ、よ、拖、て、ハ、善、の

花、の、あ、り、帰、り、を、忘、る、り、如

朝、よ、ハ、あ、知、擔、ひ、文、に、ハ、能、と

讀しし虚實は應は打ぬい
き利き此と此歌仙乃は
一いつこのお法あり
書をせり一冊子よ
余よ叙をせし小澤也
責城室といふ

寛曆庚辰夏乙田市隠士信史識



借部同書

孝悦房凡并述

世録中書は雙流のあり
予こかくるふあり月は二
肅殺は海とあり
月あつ月の
くあつへはる
書とあり
あつあつ

秋風新水を成りと流る外 暮太

惟くくう法入くこの月 風林

此方とて人より有へしとて教句とて何
うけうけけいふる世より彼ハ附たり是と
はくるとて成りて中とて又くくく附合一句の
志とてともよま句多り一外之れ論とす
亦ハ一轉あり板句他あり吉人太山杉形
の句法と定り重くしとて句よ終るべしと

月くくくく馬形いりて

暮け中とて女文字有明のく語割ありと
かた妙ありと今とてありありいと
淡くく又一轉くく薄暮層密雲遠腰
傾盆一雨定明朝老翁八十眉如雪立
抜溪邊獨木橋け轉の句とてくくく八十の
老翁ハ一向ありて事情をくくくく
是は例語くくく山解の日和んくく

そんちり予廿一指く眼を閉て推し
入る月見のつらさるる山寺はな
振舞の舞ささよとと

新よはし腰たかまねれりて 赤
又く移り

本まらしよふさめ舞の下の歌 太
新よはし腰たかまねれりて 赤

師い句や附たりと同く命苦お句ハ花

あはれのはつしとふんめあつし
舞舞の地くしとくさる男は何某さふ
おかしくさる節あはれと附たり師又と
お句とあつしとくさる男は何某さふ
そはし入ぬ信とくさる男は何某さふ
白中よ句あふう在ありかみさるの舞は
交考風の舞さるるそぬ人の多
うあれとくさる男は何某さふ

半福たしとさねを如何是佛と
可阿麻三行ありいハ又乾屎厥と系す
能又かしのしとて場を討の身と
ありしすて先は古原時系と附
とていも結とてし一是ハあ白の
をと付しとてあしとむしの一文字を
あしといきんしとてあしとてあしと
ありしとてあしとてあしとてあしと

観わたり宮女如花滿春殿只今
惟有鷓鴣飛とり又句はあしとてあしと
とありしとてあしとてあしとてあしと
ありしとてあしとてあしとてあしと

寛曆九己卯長月 画舫樓書

香

夢且齋

榮保筆



歌仙

秋風吹くもと伐りし流水の

夢太

推し入るは月

風齋

新く腰のたゞしき

全

とれを小のねり付合

太

一とてりおのり

全

仲と白ゆきし揚り

齋

本おろくくふさめ 島川下の坊
心脚怖しそ母又あまへる
かきり松さくくは枯る世は中又
そりけ文高五乃 城
移香と女衣を心古はけ 野
も季かりりは是とも 鹿
月能おきくもて松ふふふく
さくれくと色蒸 夜 寝

太 齋 太 齋 太 齋 太 齋 太 齋

細きよのりまて 中は瓦あは後
大工の口は強かしふかり
糸合は空まかへる 糸ふり
糸の 離はきまへる かし
糸はと形は又あふ糸あはれ
馬木より半は角も和くく
香おきり松の下 風 薫るあり
西 睡、ふりり 寝くく

太 齋 太 齋 太 齋 太 齋 太 齋

附録

信せいと川出と此を子繩

柳肘

海棠やまて空々ぬるのあ

楚水

子とおもふ懐もあつた乃菊

吏仙

四阿屋と植はぬる力丸とすき

吐月

主と云と端けやうもわじーのび

物雲

らうやう川とて名をぬるる

這平

ま干や綿とまよの畦すて

信夫

おろへくあまりのまやあいのき

自來

人形乃水とまよー放生と

桃鏡

何程、義一前りりや月雨

友鴻

埋ち和のり階乃人形と

白翅

ぬき色と休と及りりなちま

鷺丸

まよと八思りぬるもや月白

芦一

古井戸のびー一やうぬれ

蛙水

さち〜の〜ぬると後と石山と

曙山

長

十

カ

むとまのそ者のまやふん 百采

昔もや遠れ外のもつ 蓼雨

持くくも樹をたけ斬ふ 雪支

ひくくの一ぬそくも 曾六

凡のまれ唐のぬるや森のふ 杜泉

くも樹や舟の枝のうゑ波山 眠江

光陰のまゝるりと雨の秋 唯我

百切りまゝるりもて 山奴

川舟の帆もてあつ 操去

や舟中もまゝく 楚調

お旗のあゝ帆二ぬもて 首才

おやうねや松のうゝん 金沙

あまうくもまゝて 求光

抱翁やまゝくも 如雷

くもくもくもくも 機石

百采

房箱也 例埋かきり 埋かきり 眠我
 御東又 房のけりあり ありかつ 柳波
 陽きり也 香もな果し 梅の枝 夜光
 葉細枝ささの 物もやむの枝む 如風
 掃の岫と出さるあり いろのあり 簾文
 其流乃 叶もさる 勢う 那 山水
 去りしと 去りしと 懐和 師む 馬雲
 眠 ねと 橋乃 借さる 帝 陸 思風

橋の舟と 舟と 舟に 舟に 絶夕
 人 橋乃 舟へ 舟へ 舟に 舟に 傘車
 去るは 桑と 湖と 林と 麻の 糸 相嘉 鯉半
 りも とも 桑と 湖と 舟と 舟と 舟と 舟と 蘭哉
 の 沖 踏也 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 女 川里
 坂い 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 蘭紅
 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 夜由
 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 長瓠

千之
 古硯
 左左蘭
 牛東
 故延
 汜我
 正毅
 州風
 南羅

白牛

千之
 吏流
 蓼把
 雨磧
 萬古
 五全

香花訪く中よ茶の玉
 啼くて叶はなかりきりく
 味よしてハあし軟もあし
 右性乃れも喰ふ飯す柳の
 唇顔や月影六回ぬ海さしり
 無水の末も梅よ出く尾
 夕川中やとらぬ筆よ足せり
 雪一袖月より光るま田の
 燕波
 塘
 千
 大
 路
 野
 仙
 玉

水車 嵐亭

水の風よ志ハめるきこ那
 流むしや和すし振ふる言
 掃出ししよまよ進は安や煤よ
 下戸へあふ扉乃風や後の月
 日は深くをる帆もあり竹志
 降初てしし富ふし紙の雪
 完子
 蓼
 宜
 花
 都
 崖

雨乃此消くはくさる雨うれ 史軹
 遠のけと庭のうらぐ柳は 敬雨
 山むと川夕暮きくぬぬふふ 春賀
 掃せせく雨の暮るる庭を 飛螢
 とり入し子端田の松や川のあ 遠長
 登る巻や人とあつむ水たけへ 達夫
 村人のまをさめて枯ゆふ 一巴
 空家ののりゆくはふ枯ゆふ 籟柯

ふれては村引止は清水ふ 桃之
 麻のまやまへ中なれそ又うら 柳江
 蝶ひと川田うらけり川は 砂川
 夕まや海へ遠出る山乃 留 御風
 山田うら月し階る和庭へ氷 路上
 麻のまや川菅河の委曲を 柳花
 まふ乃宮やがのまよむあふ 山紫
 葛蒲刈る流る浮きり空の月 等鯉

本槿咲垣一清もふりら茶 帆保
新ま却ありら茶蕭の秋 ホノヤ 芦風
くさ叶も風を掃せてる朝の秋 イセ 麦浪
十方お也一被くもさくさく一舟 如之
く年のよもかど整のゆる流るる由 敬之
片月や山よむえん心めらり 越中 麻又
冬ふもるおもや梅よあま産 京 山只
誕生乃御とあまは芥子のむ 花汐

麦よま林のあやのしこ鳥 歩月
橋くくや舟と枯也如り 大和 古山
水色や集うもるる 十ッヤ 南宮
まふりを涼しく吹やあはむ 木兒
曙と巻もあひのまき 出羽 八亀
候つく叶まこ遊一華街 出羽 風叶
みゆしやあまのあや カ 瑞也 素園
林もも雲の院うら後の月 六洋 文宗

是らりしと事成るるまじりて
 淋しき此部へ寄るる意の系
 降又あまされ人あつと茶花を

色かぬ系よふ家こころ時雨
 押分る月しつらむに村らり

不

雪中菴
 葵水

雪中菴俳書目録

芭蕉翁句解	葵太述	曉花遺稿	夷流
白滝百韻	機石集	前編花三斛	如雷 如光
鬚篋	俳唐詩三物 雪門社中	續其袋	古嵐雪文集 葵太撰
俳唐詩三物	雪門社中	辛崎三吟	柳波 湖涼
蜀川夜話	赤羽左衛門 南羅牛東光	台の宿	成漢 仁太
墨繪合	古今婦女白拾 女望系撰	僧都問答	風 如述
魚と水		躑躅行脚	山奴集

忍月管抄二歌仙
并管人往都存

水の音 物雲撰

色變言 色信 七部搜養太撰

去来湖東問答 全

書肆

江戸通油町

須原屋太兵衛持

东武深月

平五八

印

